

十月から十一月にかけて、入江湾に野鳥が飛んでくる。ことの発端は友人の喜舎場君だった。

「マーニの枝で竿を作ったからタカを獲りに行こう」

と、僕と川満君を誘ってきた。僕も川満君も、喜舎場君の腕前を見てやろうと、からかうつもりで入江湾に向かった。

秋の入江湾は、土日ともなると、米兵で溢れかえっている。彼らは入江湾に集まったカモを狩りに来るのだ。僕らがタカを狙って、うろうろしていたのが気に入らなかったのか、手招きをしてチョコやキャンディやらをくれた。お菓子をやる代わりに、静かにしていろと言っていたのかもしれない。その味をしまった僕は、その日から、しょっちゅう入江湾をぶらつくようになった。

「ギブミーチョコレート」

「センキュー」

僕らの英語はこれだけで十分だ。でも次第

にチョコやキャンデーよりもっと良いものがあることに僕は気付いてしまった。僕らが狩りを楽しむ米兵たちのあとをついて回るようになったのは、お菓子が目的じゃない。僕らのお目当ては、銃を撃った後に落ちている薬きょうだ。その中の真鍮を売れば二セントになる。そうすると、ノートやえんぴつが買えるんだ。

喜舎場君が、

「ちょうど算数のノートがなくなったから」と言うので、その日も、僕と川満君は薬きょう拾いに駆り出された。僕はまるでスパイのように、草場に隠れながら、米兵の後を追った。彼らは僕らの存在にとうに気付いていたけれど、子供の遊びだと放っておいてくれた。なのに、僕らときたら、薬きょうの取り合いになってとうとう喧嘩を始めてしまったものだから、米兵の一人が狙っていたカモが逃げてしまった。米兵の一人はカンカンに怒り始めた。僕らを烈火のごとくにらみつけた。

タラりと冷や汗がこぼれ落ちる。まずいぞ。

喜舎場君はぽつりと、

「なんだよ、カモくらいで」

と呟いた。大きな声で言わないでくれ。米兵

の僕らを射抜くような眼差しが痛い。米兵が

一步こちら側へ足を踏み出す。僕らは誰から

ともなく、座り込んでしまった。彼は僕らを

威嚇するように、僕らの数メートル先の地面

に猟銃を打ち込んだ。まるで鞭で打たれたか

のように、大地が波打った。当たったら確実に

死ぬ！ 僕らは尻餅をついたまま、米兵を

呆然と見つめていた。彼らの仲間が怒り狂う

彼を止めた。何て言っていたのだろう。多分

『相手は子供だぞ』

とか、

『問題を起こすんじゃない』

とか、言ったのかもしれない。米兵は僕らを

罵って立ち去った。僕らはしばらく腰を抜か

したまま地べたに座り込んでいた。そのうち、

川満君は座り直して、僕も喜舎場君も座り直

して手あそびを始めた。まるで最初から平気の平左だったかのよう。本当は全員しばらく立ち上がる事が出来なかったただけなのだけれど。

喜舎場君が突然、

「カモくらい素手で捕まえろよ」

と呟いた。川満君が「ぶふふ」と吹き出した。

僕も安どして、

「へたくそだよな」

と笑い転げた。

結局菓きようは全部で五個。六個だったら喧嘩にならなかっただろう。欲が出たんだ。

三人で分けるためには誰かが一つ我慢せねば。

僕らはお互いの顔をじっと見つめ合った。しばらく沈黙が続く、仕方ない。はいはい、いつだって僕にはこういう役回りが巡ってくるのさ。

「いいよ、じゃ。僕で」

僕は、ふうとため息を吐いた。そして一個の菓きようを喜舎場君の手から受け取った。

僕の稼ぎはたった二セントだ。喜舎場君も川満君も四セント。ちえ。されど二セント。「宮国君は、優しいな」喜舎場君がわざとらしく僕の肩を叩いた。僕はこの「優しい」という言葉があまり好きじゃない。都合よくあしらわれている気がしてならないのだ。

僕らはしばらくマングローブの原生林を歩いた。川満君が、巨大なマングローブの木を見つけて、そこに腰かけた。続いて喜舎場君が、マングローブの根に腰かけ、

「宮国君もこいよ」と言った。

十月は朝晩と涼しい日もあれば、今日みたいな天気の良い日は、日中はまだまだ暑い。さっきの胸のドキドキが未だ三人の中に残っていた。三人はマングローブの根元に転がり、木々の隙間から差し込む木漏れ日を、眉を細めて見つめた。何と言うコントラスト。さつ

きまで僕らは死にかけていたというのに。みんな胸いっぱい深呼吸をした。海の匂いがする。唐突に、三人は安心感に包まれた。そのまま、誰もしゃべらなくなって、いつしか三人は土曜日の午後に溶けていった。

どのくらい眠っていたんだろう。高かった太陽は大きく傾いて、夕暮れに変わっていた。「寝ちゃったな」

川満君が立ち上がった。三人とも、洋服が濡れていた。あちゃ、お互いに顔を見合わせる。散々だな。

「歩いているうちに乾くだろう。」

僕が一步踏み出すと、何かが洋服に引っ掛かっていることに気付いた。僕は固まった。怖いから固まったんじゃない。僕の目はギラりと野生の光を放った。獲物が掛かった！

「あ、宮国君、それ」

喜舎場君が僕を指さした。

「あ、それ！」

川満君も叫んだ。三人は慎重に身構えた。なんて巨大なガザミなんだ。しかも、脱皮したばかりの柔らかいガザミ。ガザミのハサミが僕のズボンに引っ掛かっていた！

「やったね、宮国君」

薬きょうを譲ったご褒美が、今、神様から手渡されたような気がした。今夜の夕食はガザミだ。茹でたガザミを想像する。僕は思わずよだれを拭いた。今まで見たどんなガザミよりも大きかった。僕らはいっだって腹を空かせていた。川満君は足元の泥水をかき回した。「あ」目の前にガザミが浮いていた。川満君は思わず泥水に飛び込んだ。そしてそのガザミらしきものを拾い上げた。

「ちえ。なんだよ、これ」

川満君はがっかり、舌打ちをした。脱皮した殻だった。恐らく僕のがザミが脱ぎ捨てた殻だろう。これは僕へのご褒美だ。僕が薬きょうを譲ったから、水神様からのご褒美なんだ。

家に戻ると、ネエネがガザミを見て、すごく喜んでくれた。

うちに母ちゃんはいない。僕が生まれてすぐに病気で亡くなった。それ以来、家のことをやってくれるのは、長女のかずネエネだ。

僕にとってはネエネがお母さん。小さなお母さん。五歳も年が離れている。僕が赤ちゃんの時から僕を抱っこして世話してくれたのは、かずネエネ。母ちゃんの記憶はないけれど、寂しくはなかった。

「ヒロ坊、裏から芋持ってきて」

そこら中に豚の油の香りが充満していた。

今日は芋の天婦羅を作ってくれるらしい。これが僕の大好物。自分でも忘れていたけれど、今日は僕の誕生日だった。茹でたガザミと、芋の天婦羅は最高だ。おとうが、

「ヒロも十歳になったな」

と、言った。

「いつまでも健康第一で。長生きして、頑張りなさい」

と、お決まりのセリフを言った。

「健康第一」

「長生きしなさい」

「沢山食べなさい」

おとうは、節目節目で口癖のようにこれと言う。なぜか知ってる。第一に、おとうは戦争を体験しているからだ。第二に、母ちゃんが病気で亡くなったからだ。どんな人だったんだろう。ふと、僕の中で疑問が湧いた。

「ネエネ、母ちゃんってどんな人だった？」

ネエネは、しばらく考えていた。

「そうね、前向きでたくましい人だったかな」

「どんな風に？」

「どんな、うーん、そうね。ヒロ坊みたいだったねー」

それ以上聞くと、ネエネが困った顔を見せたので、僕はそれ以上聞けなかった。ネエネがぼつりと、

「記憶もだんだん曖昧になってきちゃうね」と笑った。僕にはわかる。記憶が薄れていく

ことが寂しいんだろ。母ちゃんは僕を産んでしばらくして亡くなった。

「ヒロ坊のせいじゃないよ」

と、みんな言ってくれるけれど、僕を身ごもって体力が落ちたことは明らかだ。

「産後の肥立ちが悪かったのよ」

と、ネエネは言った。

責任を感じているのは僕だけじゃないようだった。ネエネもどこかで責任を感じていたし、おとうもきつと感じていただろう。だから僕やネエネにはずっと「健康第一」だの「長生きしろ」だの言っているのだ。どの家も兄弟は五人くらいはいる、僕らは二人だけ。母ちゃんが生きていたら、もっと大人数だったかもしれない。

「気にしなくてもいい。どこもそんなものさ」と、おとうは言う。

僕が赤ちゃんの時にマラリアが流行った。大勢の子供が死んだ。幸い僕らはマラリアにかからなかった。どこの家も大抵数人子供を

亡くしている。だからたった二人の兄弟だけ
れど、少ないなんて感じなくていいと、おと
うは言う。僕が、僕のせいで母ちゃんが死ん
だと、責任を感じないように、言ってくれて
いるのだろう。そうだ。僕らは三人で十分だ。
おとう、かずネエネ、そして僕。三人でバラ
ンスが良い。そうだよ。

つい最近まで全く気にならなかった母ちゃ
んのことを、突然よく考えるようになったの
は、きっと運動会で、喜舎場君のお母さんを
見たからだろう。

喜舎場君のお母さんは、親子リレーで喜舎
場君と走っていた。足を紐で結んで二人三脚
していたら、途中からバランスを崩して喜舎
場君がよろめきだした。喜舎場君のお母さん
はそんなことお構いなしに、喜舎場君を引き
ずるように、そのままゴールを決めた。二人
三脚だというのに！ いいのだろうか。ゴー

ルの向こう側で先生たちが話し合っていた。
一位にするべきか、反則にするべきか。こう
いうめでたい日だから、水を差すのは良くな
い、ということ。で校長先生が両手で大きな丸
を描いた。喜舎場君はお母さんに飛びついた。
擦りむいた真っ赤な顔で笑っていた。喜舎場
君のお母さんが喜舎場君をひよいと持ち上げ、
ギュッと抱きしめた。僕はそれを見て、胸が
少しズクンとなった。いいんだ、僕は。ネエ
ネがいるから。

僕は親子リレーでおうと走った。僕も、
おとうも、運動神経は良い方だと思う。二人
三脚を練習することなく、寸前の「二で踏み
込むぞ」という簡単な打ち合わせのみで、難
なく走れるのだから。結果は二位。盛り上が
る周囲との間に温度差があった。僕も、おと
うも「まあまあだね」と軽く言葉を交わして、
二位の列に並んだ。

親子リレーに参加した保護者は、ほとんど
が母親だった。みんな母親と走ったんだ。子

供の僕らより、母親たちの方が盛り上がっていた。それを見ておとうが、

「花があるな」

と、静かに笑った。男は感情を外に出さない。僕は冷静なんだ。僕は少し気まづくなつてうつむいた。僕の保護者だけ父親。言うまい、言うまい。顔を上げた時、遠くで、かずネエネと目があった。ネエネは、僕の顔を心配そうに見つめていた。そして静かに微笑んだ。

「あの防空壕は天国に繋がっているらしいぞ」という噂が流れたのは年の瀬も迫っていたころのこと。小学校近くの防空壕の入り口に、長い間砂に埋もれていた誰かの頭蓋骨が、風のイタズラで顔を出したのだ。戦争の傷跡。こーやって時折、思い出したように顔をのぞかせる。

「戦争で亡くなった日本兵のものだろう」

新聞を見ながら、おとうが呟いた。

「可哀そうに。頭蓋骨は海の方を向いていた

らしい。帰りたかったのかな。誰だって家が
一番だ。家族の場所が一番だ。」
「おとうは、日本兵にあまり良い思い出がな
いのでしょうか」
僕が尋ねると、
「それとこれとは別だ」
と、返ってきた。
おとうには『米軍のスパイに間違われたと
いう苦い思い出』がある。戦時中のことだ。
サトウキビ畑の枯れ草を集めて、燃やしてい
たら、のろしに間違われたのだとか。標準語
も上手に話せなかったから、うまく説明もで
きず、誤解も解けず、余計に疑われたんだ、
きつと。時折、おとうを訪ねてきてくれてい
た日本兵の『イモト』という人が誤解を解い
てくれたらしい。もしイモトさんと仲良くし
ていなかったら、おとうは今頃どうなってい
たんだろう。

翌日学校へ行くと川満君が、

「肝試しに行かないか」

と、僕と喜舎場君を誘った。

「そういうのが一番よくないと思うぞ」

僕が水を差した。

「怖いのか」

「怖いもんか」

喜舎場君が僕の顔をじいっと見つめ、

「怖いのか？」

と、また聞いた。

「行くよ！ 行く。行けばいいんだろ」

僕がやけっぱちになつて言うのと、二人はお

腹を抱えて笑った。そうこなくっちゃ、と小

突かれた。なんだよ！ まったく。続けて喜

舎場君が、

「日本兵が防空壕の中へ入っていくのを、う

まやゝのボーが見たらしい」

と、言った。

「あの防空壕は天国へ繋がっているんだ。」

天国へ繋がっている、という言葉が妙に僕

の心をつかんだ。天国と言えば、僕の母ちゃ

ん。面影もないから、僕の中には美化された母ちゃんしかいない。美化された母ちゃんを思い浮かべて、

「もしかしたら会えるかな」

なんて、想像してみたものの、やっぱり怖くなつて、僕は頭をぶるぶる振った。

放課後、防空壕へ向かう僕の足は重たかつた。おとうから、こういうことは良くないと、

日ごろから口を酸っぱく言われていたからだ。

こういうこと、というのは、亡くなった人からかかうようなこと。喜舎場くんも川満君も平気の平左だ。さつき誰かのサトウキビ畑から拝借したサトウキビを噛みしめながら、兵隊ゴッコをしている。

「喜舎場君、そのサトウキビもしかして、カミミの畑から取ってきたのか」

僕がギロリと喜舎場君を睨むと、喜舎場君

は、

「違うよ、ユヌスのサトウキビ畑だよ」

と、言い訳した。

「一メートルしか違わないじゃないか」

僕が怒ると、喜舎場君はニカツと笑った。

川満君がサトウキビをかじりながら、

「ダメじゃないか、勝手に拝借したら。ネズ

ミがかじったみたい穴だらけになっていた

ぞ」

と、喜舎場君を叱るふりをして笑った。

「君もな」

僕が川満君に突っ込むと、喜舎場君がポケ

ットからサトウキビを取り出して「ほら」と

僕に手渡した。僕が受け取ると、

「共犯な」

と、笑った。

みんなポケットに小刀を忍ばせて、サトウ

キビ畑のサトウキビをこそぎ取るのだ。死角

に植えてある数本のサトウキビは、まるでネ

ズミがかじったように穴だらけである。狙わ

れる死角は割と決まっている。カーミのサト

ウキビ畑だ。先日の全校朝礼で生徒全員が校長先生にこっぴどく怒られた。カーミが学校に連絡するとは思わなかった。だからクラスのみんなには「食べすぎるな」と言ったのに。みんな口をそろえて「一口分しかとってない」だ。みんながみんな一口分取っちゃったら、すごい量になるだろ。

「思い当たる人は一歩前に出なさい」

と、校長先生は言った。

僕は……僕だけ……前に出なかった。

カーミが僕に気付かないわけはない。僕がサトウキビを拝借している時、遠くのカーミと目が合った気がしたんだ。あの時、僕を見ていたんじゃないか。

カーミと、おとうは古くからの友人で、よく僕の家にお酒を飲みに来ていた。カーミが僕を分らないわけはなかったのだ。

それからしばらく廊下で校長先生に会った

びに「何か言いたいことはあるか」と聞かれるようになった。先生たちはみんな知っているんだ。僕は知らぬ存ぜぬで通した。誰も何も言わなかったけれど、僕には構図が見えた。カーミは僕がサトウキビを拝借したことを知っていて、学校に連絡も入っていて、校長先生たちも全部知っていて、でも知っていることを誰一人僕に言わないんだ。僕に、自発的な気もちで、謝らせたんだ。知っているなら言えばいいだろ、言い逃れできないようにすれば、謝るしかない。そうしたら、しぶしぶ僕は謝る。僕はみんなが僕に期待する「良子」の枠におさまりたくはない。

けれど、待てど暮らせど、誰も僕に言っはこなかった。そのうちに、腹の底が重たく、苦しくなっていく自分に気付いた。謝罪をするチャンスは沢山あったにもかかわらず、避けているうちに、もう誰も僕に聞かなくなっただ。これで幕は閉じた、逃げ切った、と思っ

た。それは僕にとってはあるがたいことだった。それは僕に、謝罪のチャンスを失った今は毎日気が重い。僕の気も知らずに、あっさり謝罪して、さっさと叱られた喜舎場君と川満君は、荷物を下ろしてスツキリとして見える。僕ほど罪の意識に苛まれていない。反省すらしていない。現に未だこうやってサトウキビを拝借しているのだから。

僕はサトウキビをかじりながら、カーミのことを思い出していた。この前も僕の家に来て、おとうとお酒を酌み交わしていた。僕をじっと見て、
「ヒロのお母さんは立派な人だったよ。いつでも天国からヒロを見ているさ」
と、言っていた。泣き落としか。サトウキビの一件が僕の中にはあるから、僕はカーミを直視できなかった。

長いこと歩いて、ようやく防空壕に到着し

た。防空壕の前には、巨大な穴が掘ってあった。日本兵の亡骸を掘り起こして、どこかへ埋葬したようだった。

「ちえ、ないじゃないか。見たかったな」

川満君が残念そうに言った。僕は内心ホッとしていた。けれど、またやんちゃな喜舎場君が要らぬ提案をしてきた。防空壕の中に入ろう、と。防空壕の中で遊んだことは何度もある。けれど、日本兵の話を聞く前と聞いた後とでは、もう前の防空壕とは違う。何だか今日は曇り空で、雑木林の中も、どんよりとしていた。

「雰囲気があつてなお良いじゃないか」

喜舎場君が余計なことを言つてニカツと笑つた。いつもの「ニカツ」と笑いも、今日は何となく不気味に見えた。喜舎場君と川満君はクルリと防空壕の方へ向き直つて、

「喜舎場中隊長、突撃——」

「行つてまいります」

と、叫びながら、防空壕の中へ突っ込んで行

った。僕は「ダメだってば〜」と叫びながら、二人を追いかけた。

すると、突然視界が大きく揺れた。足元が抜ける感覚がした。大地が割れた、落ちる。と思った。急に目の前が真っ暗になり、僕は気を失っていた。

しばらくすると酷い頭の痛みで目が覚めた。どうやら頭を強く打ったようだった。辺りは真っ暗闇だ。けれど、様子がおかしいぞ。頭上から光がさしている。僕は、ぼんやりした目をこすり、顔をあげた。どうやら僕は穴に落ちたようだ。頭上から声がする。誰かが僕に話しかけている。ぼんやりとして、聞こえない。僕は目をこすって頭上を見つめた。そこには人が立っていた。そしてその人が僕に、

「たこつぼに落ちたんだ」

と、教えてくれた。僕は自分の体を見た。確かに、穴に落ちている。子供の僕がすっぽり入るほどの穴。少しずつ頭が動き出した。そ

してようやく理解した。僕は顔を上げて頭上の人に助けを求めた。次第に鮮明になる視界の先に立っていた男性は、軍服を着ていた。その瞬間体中に緊張が走る。

「うわ、でたあ。日本兵だあ」

僕の頭は突然クリアになった、そして大声で叫んだ。

「き、き、き、喜舍場くん、川満くん。助けてくれ、ここだ。ここに日本兵がいる」

日本兵はポカンと口を開けて僕を見つめた。

「混乱しているんだな」

と、心配そうに呟き、僕に手を差し伸べた。

「ほら、とりあえず、たこつぼから出ておいで。たこつぼなんかじゃ身を守れないぞ。」

と、言っ僕を引っ張り上げてくれた。どうやら幽霊じゃなさそうだ。僕の手を握った彼の手は温かかった。そしてとても力強かった。僕はたこつぼから這い出た。そして目の前の日本兵をじっと見つめた。胸には名前が書かれていた。

「妹？ いもとさん？」

日本兵も僕をじつと見つめて、

「ははは、僕は妹^せ尾^{のお}だ。よろしく、少年。せ

のおでも、いもとでも、好きなように呼んで

くれたまえ」

と、言った。そしてニカツと笑った。僕は、

状況が飲み込めず、困った顔で、ヘラッと笑

った。

僕らを追い越すように次々と妹尾さんの後

方から人が走ってきた。

「え、何？ 何？」

僕は瞬時に悟った。まずいぞ。喜舎場君た

ちがユヌスのサトウキビを盗んだこと、もう

学校に連絡が行ったんだ。肝試しに来たこと

もばれてしまう。学校の先生たちが一斉に僕

らを叱りにきたのかもしれない。ありとあら

ゆる言い訳が光の速さで脳内を駆け巡ってい

く。どれにしよう、つじつまを合わせなくち

や。ああ、僕の日常はなぜこんなにも言い訳

ばかり、嘘ばかり溢れているんだ、と自分で

もほとほと呆れかえってしまった。嘘やつじつま合わせを考え続けるのがこんなにきついなんで。

テンパった思考のまま、僕はとりあえず謝ることにした。言い訳はおいおい。そう思つて、とにかく、

「ご、ごめんなさい。僕たち：」

と、言いかけた。もじもじ言葉を選んでいると、妹尾さんの後方から走ってきた男性に目が引き寄せられた。「あ！」僕は思わず、声に出して驚いた。あれは、間違いなく『おとう！』真っ白い着物を着て走りこんできたのは、間違ひなく僕のおとうだった。僕があっけにとられていると、妹尾さんが、

「さ、行こう。少年」

と、僕の手を取った。僕は人の流れに押されながら、妹尾さんに引つ張られながら防空壕の奥の方へ押し込められた。

周囲の人たちはみな白装束を着ていた。

「おとう」

僕が思わず叫ぶと、周りの人たちから、静かにするようになめられた。僕の隣には妹尾さんと、小さな女の子を抱いた女性、そしてその隣におとうがいた。けれど、どことなく、雰囲気違って見えた。

「おとう？」

僕が声を出すたびに、周囲に叱られた。

「気づかれたらどうするんだ」

気づかれる？

誰に気付かれるって言うんだ？

学校の先生に？

僕はこんがらがった。訳が分からなかった。そしてみんな白装束という異様ないで立ちは、実に不気味だった。不安がこみあげてくる。この異様な空気感に次第に震えが出てきた。

すると、隣の、小さな女の子を抱いた女の人が僕の頭をポンポンと撫でて、

「大丈夫さ、大丈夫」

と、小声で呟いた。僕はその女の人の目を見ながら、静かにうなずいて会釈をした。

「大丈夫さ、大丈夫さ」

と、言われると、少しほっとする。

いつも僕に、

「大丈夫さ、大丈夫さ」

と、言ってくれる、かずネエネを思い出した。

ポロリと涙がこぼれ落ちた。その人はそっと自分の裾で僕のなみだを拭いた。そして僕の頭を優しく撫でて、につこりとほほ笑んだ。なんて温かいんだ。しばらくするとその人が

「どこの子？」とヒソヒソと僕に尋ねた。

「ぐすくまの、ひろです。」

僕が答えると、女性は目をパチクリさせて、

「ぐすくまのふぁ？あつがい、ぴんなぴとう」

と、クスクス笑い出した。

「変わった子だね。ぐすくまは、うちだよ。」

こんな大きな子がいたかな。」

その人は、大きな美しい目をしていた。

『あの防空壕は天国に繋がっているんだって』
なんて変な噂を聞いた日から、ぼんやり考え

ていたことがある。もしも本当に防空壕が天
国に繋がっているなら、母ちゃんを見たいの
か？ 母ちゃんの面影すらないのだから、母
ちゃんに会えたって分かりっこない。会って
も意味はないと思う。打ち消しても打ち消し
ても、同じ問いかけが僕の頭をグルグル巡っ
た。「会いたいのか？ 会いたいのか？」と。

今、突然その質問がもう一度僕の頭に浮か
んだ。僕は「会いたい」と心の中で呟いた。
母ちゃん。

その時、遠くでシュルシュルシューと異
様な音が鳴り響いた。「くるぞ」誰かが言った。
何が来るんだ？ 母ちゃんが僕の肩をしつか
りと抱きしめた。あ、温かい。そう思った瞬
間。ドーンと地響きが鳴った。そしてガラス
の割れる音が響き渡った。僕は両手で耳を塞
いだ。大地が裂ける。地球が壊れる。僕は訳
が分からずに、頭ごと抱えこんだ。耳の鼓膜
が破れそうなほどの大音量だった。体中が振

動で震えている。今まさに地球は壊れようと
していた。あまりの地響きに防空壕の天井も
少し崩れてきた。埋まる、死ぬ。防空壕の中
はホコリが舞っていた。息が出来ない！ 眩
暈がする。突然の恐怖と、混乱と、不安で、
僕は気を失ってしまった。
どれくらい長い時間が経ったのだろう。気
づくところには静寂が戻っていた。
「終わったの？」
妹尾さんが外を見る、と言ったが、周囲は
止めた。
「敵が島に上陸しているかもしれないから、
しばらく身をひそめておいた方がいい」
と、みんなが妹尾さんを止めた。しばらく島
民と妹尾さんとの間で押し問答が続いたが、
結局防空壕の外から、誰かの声がして、どう
やらもう外に出ても大丈夫なことがうかがえ
た。
防空壕の中の空気は薄かった。人がぎゅう
ぎゅうに入っていたから、みんな雪崩のよう

に、外へ押し出されていった。女性が（とい
うか僕はもう、僕の中では、この女性を母ち
やんだと信じていた）僕の肩を支えながら、
「ゆっくり外に出よう」
と、言った。その人が抱いていた小さな女の
子は、僕を見てニコニコほほ笑んでいる。間
違いない、かズネエネだ。僕は女の子を見て
ほほ笑み返した。顔を上げると視線の先に、
僕を見つめるおとうがいた。おとうは疑い深
く僕を凝視していた。そして「君は」と、言
いかけると、それを遮るように、後方から誰
かが「おい、無事だったか」と駆け寄ってき
て、おとうの背中を軽く叩いた。僕はその人
の顔を見て顎が外れそうになった。「しまつ
た。」僕はポケットの中のサトウキビを思わず
ギョツと握っていた。
「カーミだ」カーミが僕に気付いた。
カーミは僕の顔をじっと見つめて、
「どこの子？」
と、言った。おとうは首を横に振って「さあ」

と答えた。

やっとこさ防空壕の外に出ると、朝日が頬を染めた。まぶしい。どうやら、災害は朝まで続いていたようだ。解放感に安堵したのも束の間、次の瞬間、僕は未だかつて体験したことのない衝撃を目の当たりにした。

朝日に照らされて、島がその輪郭をあらわにした。島は完全に變形していた。雑木林が消えた。家が消えた。何もかもが消えていた。まっさらな大地。全てが、消失。そこには、ただの平地が広がっていた。一晩の間に、島は全て壊されてしまった。遠くに海が見える。遮るものが一つもない。

「ああああ」

言葉にできない言葉が僕の口をついた。

島が消えた。島は消えた。

混乱する頭を、両手で必死に抱えた。次の瞬間、麻痺していた思考に電気ショックが走った、ハッと息をのむ、胸騒ぎが押し寄せる。喜舎場君と川満君はどうなった。

「喜舎場君！　川満君！　どこにいるんだ」
僕は力の限り叫んだ。けれど、二人の姿は
どこにもなかった。
「誰を探しているの」
母ちゃんが、パニックに陥った僕を、心配
そうに見つめた。僕は声にならない声を、絞
り出すように、
「ぼ、ぼ、僕の友人の喜舎場君と川満君と一
緒に防空壕に来たんです。防空壕で肝試しし
ようとしてて。ほ、本当にごめんなさい。バ
チが当たったんだ。おとうが、亡くなった人
をからかうもんじゃないって言ったのに。ご
めんなさい。」
と、言った。
母ちゃんは、良く分からないという顔をし
て、おとうの方を見つめた。
「カーミも、ごめんなさい。カーミのサトウ
キビ畑のサトウキビ、僕も盗んで食べていま
した、ごめんなさい。」
僕は声をあげて、わーわー泣きじゃくった。

今起こっていることは天罰に違いない。だとしたら、謝るしかない。何もかもに謝るしかない。

カーミは僕をじっと見つめて、
「うちのサトウキビ畑？人違いじゃないかな？私はサトウキビ畑など持っていないよ」と、答えた。その答えがより一層、僕を絶望的な気もちにさせた。拒絶されたような気がした。

「そんなこと言わないでよ、謝るから許してください」

僕はなおも一層カーミに泣いてすがった。

カーミは、ほとほと困り果てて、

「そうだね、でもサトウキビ畑を始めるのもいいかもしれないね」

と、呟いた。

カーミも、おとも、母ちゃんも、何もなくなつたまっさらな島を見渡してため息をついた。おとうは僕らの肩をポンと叩いて、
「ちゃーわいどー、ちゃーわいどーさ」

と、呟いた。カーミもそれを聞いて頷き、
「命があるだけ、ありがたい」

と、言った。母ちゃんが、

「あっがいたんでい、命があるだけましだよ。

神様に感謝だね。」

と、僕の手を強く握った。僕は訳も分からず、
ただ頷くばかりだった。

妹尾さんが僕らの方へやってきて、

「逃げ遅れた人たちが結構いるようだ。がれ
きの下に生き埋めになっているようだ」

と、泣きながら言った。疲れはてた体に、弱
弱しく悲しみがこみ上げてくる。ああ、そう
か、分かったぞ。その瞬間僕はやっと気づい
たんだ。これはいつか、おとうが話してくれ
た宮古の戦争の記憶。あの艦砲射撃の記憶な
んだ。僕は生き埋めになった人々に手を合わ
せた。

僕の脳裏に学校の授業風景が蘇った。道徳
の時間、僕は外ばかり見ていたつけ。どうで

も良いことばかり考えていたんだ。先生の話も聞かずに。教科書数ページの出来事が、こんなにも長い夜だったなんて。

「どうか成仏してください」

僕は心の中で手を合わせた。

「とーと、とーと」

『帰りたいたいだろう。誰だって家が一番だ。家族の場所が一番だ。』

おとうの言葉が頭の中で響いた。防空壕の入り口から出てきた骸骨は、今このがれきの下に埋まっている誰かなんだ。おとうの言う通りだ、帰りたかっただろうな。帰りたかっただろう。泣き続ける僕を、母ちゃんがギュッと抱きしめた。喜舎場君のお母さんが、親子リレーで喜舎場君をギュッと抱きしめたように。
「強く生きていくんだよ」
と、母ちゃんは言った。ああ温かい。僕はうなずいた。母ちゃん、僕は強く生きていくよ。

僕は目を閉じた。母ちゃんは僕を抱きしめたまま、ゆりかごのように、ゆらゆらと揺れた。それはまるで風のように、まるで波のように、僕を優しく包み込んだ。

「宮国君、宮国君」

誰かが僕を揺すっていた。瞼の裏側がオレンジ色に染まっている。

「まぶしい」

目を閉じたままでも分かる、まぶしすぎる太陽。思わず手で顔を覆った。炎天下。なぜ？ そつと目を開ける。そこへ喜舎場君の心配そうな顔が飛び込んできた。「あ」仰向けになつたまま、思わず周りを見渡す。僕は運動場の真ん中で倒れていた。なんて太陽の光がまぶしいんだ。校長先生の心配する声が運動場に響いている。

「大丈夫か」

僕はゆっくりと起き上がる、喜舎場君が僕

の背中を支えてくれた。喜舎場君の肩を借りながら、立ち上がった。僕は喜舎場君の目を見つめ、

「生きていたんだな、良かった」

と、呟いた。列の後ろを見ると、川満君が心配そうにこちらを見ている。良かった、二人とも無事だったんだ。僕は周りを見渡した。この光景、ああ、思い出したぞ。僕にはもう一つ大事な仕事が残されていた。

僕は一步前に出た。校長先生が心配そうにこちらを見ている。僕は大きな声で、

「僕もサトウキビを、食べました。すみませんでした。」

と、叫んだ。喜舎場君は、ギョツとした顔で僕を見た。

「言っちゃうのか」

喜舎場君は数秒悩んで見せたが、バツが悪そうな顔で、結局頭を下げた。

「僕も食べました。すみません」

すると、後ろから川満君もかけ寄ってきて、
「ごめんなさい」

と、呟いて校長先生に頭を下げた。喜舎場君
が僕の耳元で、

「どうしたんだよ、いいのか」

と、言っただけけれど、僕はまっすぐな瞳で、

「いいんだ」

と、答えた。

僕の突然の告白に、校長先生は少し驚いた
表情を見せた。そして、

「ああ、そうか。よし、分かった。なら放課
後に一緒に謝りに行こう」

と、言った。保健室の先生が僕の方へ歩いて
きた。

「大丈夫？保健室で休もう」

と、僕に言った。僕はよろめきながら、先生
に抱えられ、保健室に歩き出した。

空は晴れていた。沢山の建物があちこちに
建っている。木がざわざわと音を立てて揺れ

ている。風が吹いている。鳥たちが鳴いている。僕の瞳にじんわり涙が溢れた。何もかもが元通り。島は蘇った。長い年月を経て、色んな人たちの苦労の上に、島は平和を取り戻したんだ。平凡な日常の尊さ。

『強く生きていくんだよ』

母ちゃんの言葉が風の中に消えて行った。

エピソード

「父さん、宮古島に帰ってくるのっていつぶり？」

娘が飛行機の窓から雲を撮影していた。着陸態勢に入ると機内アナウンスが流れる。娘は振り向いて笑った。

「父さん、島が平べったい」

おとうも、かずネエネも今は那覇に暮らしている。誰も宮古には住んでいない。いつぶりだろう。戻ったところで誰も知り合いなどいない。住んでいた場所は全て売り払った。それでも、娘には一度自分が生まれ育った場所を見せてやりたかった。

レンタカーのカウンターで鍵を受け取った。娘は大きなキャリーケースをガラガラと押しながら、ひいひい言っている。こんな小さな島だ、おしやれして出かける場所もないぞ、一体何を持ってきたんだ、と心の中で思ったけれど、言わなかった。年頃の娘なのだ。色々あるわよ」妻の言葉が脳裏に過った。

下手なこととは言えない。

小さな軽を借りた。後部座席は、娘のキャリーケース専用のスペースとなっていた。

「私、方向音痴なんだよね。」

娘がニカッと笑った。それが妙におかしく
って。こんな小さな島だから、迷っても、その
のまままっすぐ行けば、必ずどこかには出ら
れるさ。

宿泊予定のペンションまでは空港からたつ
たの十五分だった。

「笑っちゃうくらい、運転しやすそうな道だ
ね。」

何もない田舎道を見つめながら娘が笑った。

「デジャブ？さっきから同じ景色ばかり続い
ていない？」

娘は車窓から景色を眺め、変わり映えしな
い景色に変化を探していた。

「今日はね、父さんが昔住んでいた場所の近
くに宿をとったよ。歩いて行けるところだか
ら。行ってみないか。」

「いいね、いいね。見てみたいよ。父さんが住んでいた場所。今は誰かが住んでいるかもしれないよね、お願いしたら中とか見せてもらえるんじゃない？」

娘は期待に胸を膨らませているようだった。期待を裏切るようで申し訳ない気持ちになっただ。恐らくあの土地にはもう誰も住んではないだろう。

宿にチェックインすると、ペンションの人が僕の名前を見て、

「宮国さん？なんだ、宮古の方？」と尋ねた。

「里帰りです。」

僕は少し照れくさくなってうつむいた。

ペンションを出ると、強い日差しにやられた。「まだまだ暑いね」

娘の秋休みを利用して宮古に戻ってきたが、天気の良い日は、やはりまだまだ夏だった。

僕らは昔の住所まで歩き出した。何もな一本道。両端にはサトウキビ畑が延々と続いている。

「ひとつっこ一人いないね」

娘が笑った。頭上を鳥が飛んでいく。

「父さん、タカ！時代劇みたい！」

娘がはしゃぐ。

「ああ、昔よく獲ったよ。」

「えー、そうなの？」

「サシバって言うんだ」

「差し歯？変な名前」

娘がお腹を抱えて笑っている。

「美味しいんだよ」

「えー、差し歯が？うっそだあ」

僕らは歩いた。どこまでも続く一本道を。

そしてはたと立ち止まった。「あ」胸が高鳴

った。住所は途中からすでに分からなくなっ

ていた。けれど、確信めいたものを感じてい

た。サトウキビに覆われていても分かる。き

つとここだ。僕が昔住んでいた場所。

僕は両手を広げて娘に言った。

「あそこから、この辺りまで」

「え？あそこから、ここまで？が、何？」

「父さんが住んでいた家だよ」

すると娘は目をまん丸くして、

「家なんてないじゃん、草むらじゃん」

と、叫んだ。そして、二人して腹を抱えて笑

った。

「草むらじゃないよ、これは。サトウキビ畑

だよ」

面白いもので、あれこれ説明していると、

こまごました幼少期の記憶がよみがえってきて

た。

「湾が近くにあってね、よくウナギとかカニ

とか獲りに行っていたんだよ。確かここら辺

から行ったような気がする」

僕は雑木林を指さした。

「入口らしいものはないけど？」

娘が雑木林を覗き込む。確かに入り口はも

う消えていた。でも僕にはわかった。ここは

かつて湾への入り口だった、ここから湾へ歩

いて行っていたんだ。道はながらく誰も通ら

なかったせいで、木々に飲み込まれていた。

「なんか、虫がいそうで嫌だな。毒蛇とか。」

娘がしぶい表情を見せた。

「ははは、宮古にハブはいないよ」

あの頃は、どうして雑木林の中など、躊躇なく入っていたのだろう。湾の泥水の中で泳いでいたし、マングローブの根本に寝っ転がっていたし、草むらの上に寝っ転がっていた。いつも裸足で駆け回っていた。

「大人になっちゃったんじゃない、父さん」

娘が僕をからかった。『大人になった』という響きが、妙に感傷的にさせる。ずいぶん遠くまで来てしまったなあ。

そばで波の音が聞こえる。

「喜舎場中隊長、突撃します」

僕は振り向いた。

どこまでも続くサトウキビ畑の一本道。

「時間がないのでありまーす」

懐かしい声がする。

もう一度雑木林を覗き込んだ。

今の僕に、この雑木林に飛び込む勇気はない。

「待ってよう」

そんな僕の足元をすり抜けて、幼き日の僕が元気いっぱい、笑いながら駆け抜けて行っ
た。